

## 第6章

### 少子化を求めた

### 家族と女性のリアリティ

#### 1. 高学歴・少子時代の母親のアイデンティティ

- 1) 専業主婦の憂鬱
- 2) 二つの少子化
- 3) 高学歴化がもたらしたもの
- 4) 選択された母の先にあるものは

#### 2. 親が親になりきれない背景—少子化、高学歴化、産業化の落とし穴

- 1) 少子化の背景が示唆するものは
- 2) 高学歴化と産業化の進行がもたらしたものは
- 3) 落とし穴はどこに

#### 3. 子育てが不安になる時代背景

- 1) 子どものいる家族が少数派に
- 2) 親専業になる女性が少数派に
- 3) 親になる学習の機会が失われる
- 4) 子育ての目的と子どもの位置づけの転換を

**Column6-1** 高校教師から二男二女の母に、そして議員に

第Ⅱ部冒頭に記したように、本章の三つの節は『児童心理』（1999年10月、2002年11月、2004年4月）掲載の論考が原本である。著者は馬居政幸だが、妻喜代子と4人の子どもたちとの共同作品であることも記した。その証左としてのColumnの執筆を喜代子に依頼し、リアルな証言録を得た。本章末尾に紹介する。団塊の世代の男女観を省みる契機にして戴きたい。さらに4人の子どもたちを含む後輩のみなさんが、新たな人（あいだ）と家族のあり方を問うための素材として活用されることを願っている。

なお、各節の冒頭部に、初出時の掲載誌名と発刊年月を記載した。各節の内容の執筆時期を確認する際に活用いただきたい。

## 1. 高学歴・少子時代の母親のアイデンティティ

### 1) 専業主婦の憂鬱

①「もし、おれが家で仕事していなかったら昼ごはん一人だよな、つまらないね」「そうよ、つくる気もしなくて、朝の残り物ですませたり、ほかほか弁当を買う主婦の気分、わかるでしょう」

これは急ぎの原稿書きのために自宅でワープロをたたき、何年かぶりに昼食を妻と二人で食べる機会があったときに、ふと出た私の言葉とそれに対する妻の応答です。ただし、現在のことではありません。1949年生まれの私が41歳、3歳年下の妻が38歳のとき（1990年）のことです。

1980年代半ば、思春期をもじった思秋期という言葉がテレビドラマとともに流行語になりました。団塊の世代の女性、とりわけ専業主婦となった女性の子どもの手が離れた後の漠然とした不満と不安（アイデンティティのゆらぎ）を表現すると理解されました。団塊の尻尾を夫にして、4人の子どもの次々と生み育てたため、少し時間のズレはあるものの私の妻もまた、三食昼寝つきと擲諭された子育て後の専業主婦のあり方に疑問を抱くことにおいて、例外ではありませんでした。

それから10年後の1990年、事情は変わっていたでしょうか。それを考えるヒントとして、私より一世代年下の友人のパートナーのNさんの言葉を紹介します。

②「仕事をやめて専業主婦になったんですから、絶対に失敗できません」

③「子どもができて最初に悩んだことは、友だちがいないことです。近所に小さな子どもをもったお母さんが一人もいなかったからです」

②は先の妻との会話が交わされた同時期に、仕事の打ち合わせで友人宅を訪問した際、生まれたばかりのお子さんをあやしながら語られたNさんの言葉です。正直、驚きました。一世代年下の女性から母としての使命感のような言葉を聞くとは思っていませんでした。そして心配になりました。4人の子どものつきあいから、子どもは親の思いどおりには育たないことを日々経験していたからです。Nさんが有能な編集者であったことを知っていたため、当然仕事を続けると思っていました。それが自ら進んで専業主婦になり、仕事と同様に（というよりは仕事にかかわって）、子育てに関わろうとしているわけです。その思いの強さが育児不安に繋がらなければいいが、と願ったことを覚えています。

実際にはどうなったのでしょうか。やはりといえば失礼になりますが、予想はあつたようです。今年（1999年）家庭教育に関するシンポジウムで、子育てサークルの代表となったNさんとシンポジストとして同席する機会がありました。そこでNさんが語った話の冒頭の言葉が③です。ご自身の体験をふまえ、孤立した母親がアパートの一室でわが子と向き合う不安の深さを基にした、子育てサークルによる母親支援の重要性を訴えるNさんの話は、会場に集まった若いお母さん方の共感を得ました。母親になったばかりのNさんを知る（不安を抱いた）者として、より深い感動を抱きました。ただ、私と妻と子どもたちとで模索してきた世界との違いにも気づきました。

私の妻もまた大学卒業後、教師をしていたため、仕事→結婚→子ども→離職というキャリア（？）コースはNさんと同じです。しかし、Nさんのような使命感にも似た母親としての自覚（気負い？）を妻に感じたことはありません。後に紹介しますが、離職の原因も異なります。コースは似ていても、その変化の原因や子どもと夫への関わり方、何よりも妻、母、さらには一人の女性としての自己認定（アイデンティティ）において異なる面があるようです。この違いにこだわることから本稿の課題に答えていきたいと思えます。理由は妻とNさんの間にある10年という歳月こそ、女性の高学歴化と日本社会の少子化が同時進行する過程であったからです。すなわち、団塊の世代に続く妻と異なり、私より一世代年下のNさんの世代こそ、高学歴で少子時代を生きる女性の最初の世代だからです。

## 2) 二つの少子化

日本の少子化は最近始まった現象ではありません。第二次大戦後のベビーブーマーとして1949年生まれの270万人をピークとする団塊の世代が生まれたあと、出生数はわずか10年で160万前後まで減少します。正確には減少させたというべきでしょう。さまざまな施策やキャンペーン等を通じて、意図的に出生数を減らしたためです。そのことを端的に示すのが、一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均値（合計特殊出生率）の減少です。1949年に4.3であったのが、10年後には2.1と半減します。その後、団塊の世代の成長とともに親の数が増え、出生数は73年の209万（団塊ジュニア）に向かって増加します。ただし合計特殊出生率は、人口が再生産されるために必要な2.08（人口置換値1999年時点）とほぼ同率で推移します。日本の家庭は1960年前後を境に、二人っ子の時代になったわけです。そのため、1960年を境とする少子化（少産化）は、現在の少子化と異なり、人口政策の成功例として称賛されました。

ところが、1980年代に再び合計特殊出生率が下がり始め、1989年の「1.57 ショッ

ク」を経て昨年（1999年）の1.38と人口置換値を大きく割り込みます。少子化が国の基盤を揺るがす問題とされる理由です。この二回目の出生率低下に対して、当初、一人っ子時代の到来と騒がれました。しかし、それが間違いであることが理解されるようになってきたと思います。子どもを産む年代になった女性が出産を迷った、というよりもその前提となる結婚を前にしてとまどったこと、すなわち晩婚化が原因です。日本は結婚しなければ子どもを産まない社会です。逆に結婚すれば子どもは二人、という社会でもあります。したがって0または2、これが現在の出生率低下の原因です。ちなみに日本の配偶者をもつ女性の出生率は今なお2.2を維持しています。

ところで、日本の少子社会がスタートした1960年生まれは2000年で40歳。現在の少子世代の親にあたる（なるべき）人たちこそ、模範的な人口政策の成功例として評価される二人っ子時代に、日本社会がなった（変えた）後に生まれ育った人たちです。現在の二回目の少子時代の母親とは、自らもまた少子時代に生まれ育った世代です。その意味で、もし、現在の少子時代の母親のアイデンティティに問題があるとするれば、わが子との関係の前に、母としての自己形成過程を問う必要があると考えます。アイデンティティとは、自己のあり方を生きる場（生きてきた世界）とセットで位置づける概念だからです。では、どのような世界（生きる場）のなかで、現在の母親は自己形成してきたのでしょうか。それが本稿のもう一つの課題である高学歴化です。

### 3) 高学歴化がもたらしたもの

戦後日本の教育施策の課題は、義務化された中学校教育の実現でした。そのピークは団塊の世代の中学進学時でした。その後、子どもの数の減少に反比例して高校進学率が上昇し70年代半ばにピーク、すなわち90数パーセントに達します。日本に生まれ育ったほぼすべての子どもたちが高校に進学する時代になったわけです。75から15を引けば60。二人っ子時代の始まりである60年生まれが15歳に達したときに高校進学率はピークを迎え、さらにその先も望むようになります。この世代から短大を含む大学への進学率は40%に達します。ただしこの後、出生数は団塊ジュニアに向かって再び増加に転じ、高校（県）は進学率保持（増設）を、大学（国）は進学者数一定（競争の激化）を選択します。ただし短大の増設は進み、76年に専修・専門学校が制度化されます。それに対して進学を望む家庭の子どもは二人。高度経済成長時代を経て日本は豊かな社会になり、男女にかかわらず、子どもを進学させる余裕ができました。その豊かな社会を創る方法が、義務教育修了者を工場労働者、高校卒業者を中堅技術者、大学卒業者をエリート、とする学歴別の人材配分装置でした。戦後の工業化は、

学校での成績（本人の努力）で自己の社会的位置を決定できる仕組みとともに進化したわけです。上位学校への入学可能性が、わが子の人生の方向を決定するなら、できるだけかなえてやるのが親心です。二人っ子への夢は、短大と四大という実質上の男女差はあっても、大学進学者約40%、専修・専門学校を入れれば、同年代の七割近くが高校卒業後進学するという現実として具体化します。

さらにそれは、かつては農家の嫁になるはずの多くの女性が、都市で核家族をつくる過程でもありました。舅、姑、夫につかえ働き続け、その合間にしか子どもと関われない嫁ではなく、家事・育児を専らにする主婦が理想とされました。専業主婦の誕生です。“サラリーマンの夫の留守を守り、二人っ子の未来は自分の責任”、これが専業主婦に共通する思いではなかったでしょうか。しかし問題は育てられた側。いかに親の愛が深くとも、それが子どもにプラスかどうかは別問題。そのように育てられた女性が、自分の子どもを産み育てることに戸惑っていることもまた現実なのですから。

親の子どもの進学への夢は進学競争の激化として子どもに迫ります。それも男女を問わず。このことは女性の進学率上昇に関してはプラス面もありました。短期大学への進学というバイパスを経由して、女性の進学率は4年制大学に進学する者を合わせると80年代半ばに男子を上回ったからです。

このように60年代に始まる少子第一世代から、女性の高学歴化が始まるわけです。それは性差ではなく自分の能力で自己の位置を決定できることが、アイデンティティを構成する要素になることを意味します。その先には自己実現を最上位とする生き方が待っています。工業化から情報化の段階に入った80年代の日本社会が彼女らを迎えました。経済の拡大による人手不足と男女雇用機会均等法の後押しもあって、多くの女性が仕事の面白さと自由な時間と友人と金銭を得る喜びを味わいました。だがそれは自分が育つ過程で、母親になるためのアイデンティティを構成する要素を獲得する機会を失う過程でもありました。専業主婦として自分を育てる母への感謝は育まれても、30代後半にはその役割が終わり、新たな人生に戸惑う母の姿もまた見ることになるのです。二人っ子として学校中心に育つ過程に、自分の親以外に身近に子どもを育てる女性の役割を経験する機会は極めて少なくなります。観念の世界で理想的な親を描けても、子育ての喜びと理不尽さの感覚の学習はできません。何よりも、成績を典型とする学校が要求する自己実現の価値のヒエラルキー（自分が努力した結果は自分に返ってくる）のなかに、他者（子どもや夫）の成長（昇進）に自己実現の成果を委ねる生き方は入っていません。すなわち、専業主婦の母のもとで学校中心に二人っ子として育った女性には、自己認定（アイデンティファイ）の対象に母として生き

る自己像を定位する機会を得ないまま成人することが猝付けられる、といえないでしょうか。母親像は職業人としての自分と並んで自己のアイデンティティを構成する選択可能な観念の一つ以上のものではない、ともいえないでしょうか。そして最も身近なモデルとなる自分の母親の人生を通して、母として生きることのみでは自己の人生が終わらない現実をリアルにビルトインされていないでしょうか。

ちなみに、少子第一世代に先立つ団塊の世代の大学進学率は、男子 20～25%、女子 10～15%。その親は工業化が進む前の日本で生まれ育った人たち。専業主婦は少数派。貧乏人の子だくさんを支えるために働きつづける両親を横目に、兄弟姉妹や近隣の人たちに揉まれながら、学校の外でしか味わえない人生の理不尽さと快楽を経験しながら自己形成した最後の世代。ただし、団塊の世代が創った家族もまた（家族こそ）、高学歴・少子時代の真っ只中。少子世代の母親と団塊の世代の母親の相違はどこにあるのか。この点にこだわりながら、改めて、妻とNさんの話に戻りたいと思います。

#### 4) 選択された母の先にあるものは

大学の後輩として出会った妻は、姉と弟には生まれた次女。彼女が生まれた日、男ではないということから父親が仕事から帰ってこなかったことを根に持って（?）、男に絶対負けないと勉強と部活（テニス）に頑張る。その一方で、働く母親にかわって中3から家事を担う。おまけに、隣近所は親類縁者が一杯、その必然として静かに勉強できる環境はなく、屋根裏に自分の空間をつくり、受験に備えたとのこと。

念願かなって大学に入学し、4年後に埼玉県の高校教師になった。ここまでは計画通りでした。ところが、就職一年後に結婚した相手（私）が悪く、夫の赴任とともに退職し静岡に転居。それでも再び教師になる予定であったが、次々と子どもが生まれ、心ならずも（?）専業主婦となる……。少なくとも、高校や中学の同窓会でいつも妻に向けられる言葉は、あなただけは働き続けると思っていたのに、という評価でした。だがそれは妻が例外と思われていたからこそ得られる評価。大学に進学しキャリアとして働く女性が珍しくなければ話題は逆です。むしろ、仕事より母役割を自らの意思で放棄することの方がアイデンティティをゆるがす問題になったはず。

加えて団塊ジュニアの母として出生数の多さは親の多さであり、頼りにする（口うるさい）先輩・後輩に不自由しません。人間関係の豊かさはアイデンティティの豊かさの基盤、子育て後の不安と不満は昼食時ではなく、仲間のなかで解消できます。「女のくせに」という言葉に奮起しながら自分の道を開いてきた妻にとって、夫の赴任で移ってきた官舎の先輩・後輩と付き合うのに時間はそれほど必要なかったようです。

それに対して専業主婦を選択したNさんに失敗は許されません。だが仕事にはマニュアルと教える先輩がいますが、子育てはどうでしょう。団塊の世代が子育て過程で自然に創ってきたネットワークは、少子化第一世代には支援活動のために意図的に創る対象、おまけに二人っ子として大事に育てられた女性は、公園デビューと揶揄されるように、仲間づくり自体にマニュアルが必要です。

農業社会に生きる母親にとって、子どもを育てる母の観念は自己像（アイデンティティ）の理想ではあっても現実ではありませんでした。それを現実化したのが高度経済成長とともに一般化した専業主婦です。しかし、それだけで子育て後の人生を支えるアイデンティティを維持することはできませんでした。後輩の団塊の世代は、多産世代の最後として人を産み育てることを自己の人生の中核に据えましたが、やはりアイデンティティを維持できないことを知り、母役割終了後の人生を模索し続けています。そのまた後輩の専業主婦が一般化する過程で生まれ育った少子化第一世代は、母のアイデンティティ自体を選択の対象にし、史上初めて女性は結婚しない選択肢を手に入れました。ただしそれは、先輩や親の世代よりも母を選択した者に、より強く成果を求めることをアイデンティティの中に差し込むことでもありました。しかしそれは自己とは異なる存在を育む子育ての作業には馴染まない要素。よき母であろうとすればするほど高まる子育てへの不安と不満、それを感じる自己への責任、両者の狭間で先輩たちよりもより一層とまどい悩まざるをえないのではないのでしょうか。

もっとも、この世代はいまだ子育て真っ最中。一方的なラベリングは控えたいと思います。ただ、伝統的とされる母親のあり方を女性のアイデンティティの中核に据えることは、理念の上でも事実の上でも避けるべきであることは間違いない選択と考えます。子育てに一生を捧げる心やさしき母の観念は、まさに観念であって事実ではありません。男が自分の母と妻に求めた幻想といった方がよいかもしれません。皮肉にもその幻想を理想に置き換えて誕生した専業主婦の現実が、二人の子どもの母役割では80年の人生を統合するアイデンティティの中核になりえないことを証明しました。

私たちは子どもを少なく産んで良く育てることを目指して、高学歴化と少子化をセットで進めてきました。その結果、さまざまな問題はあっても、曲がりなりに自分の人生を選択し創造できる豊かな社会を築くことに成功しました。しかし、その社会を担う新たな世代の創造には、成功していないと思わざるをえません。そのまさに中核に、新たな母親のアイデンティティの形成の失敗があるかもしれません。それは父親のアイデンティティの形成の失敗であることもまた、言うまでもないことです。

## 2. 親が親になりきれない背景

### 一 少子化、高学歴化、産業化の落とし穴

#### 1) 少子化の背景が示唆するものは

「一人二人で親になると思うな、三人、四人育てて初めて親になるのだから」

これはある子育てセミナーで参加者の女性から伺った話だが、その方が初産の時、一週間経って帰ろうとする実家の母が残した言葉とのことである。まさに子育ての知恵の結晶を教わる思いがしたが、同時にこの原則に従えば、私が出会うほとんどの親は、親になれないまま子どもに向かわざるをえないことに気がついた。日本の家庭の子どもが平均二人になったのは1960年前後だからである。そして今(執筆時2002年)、「二人っ子」として育った最初の世代も40代。もし、「親になりきれない親」というのが、現在、乳幼児期や学童期の子どもをもつ親の問題とすれば、その根は親の親、すなわち今60代に達している人たちの子育てにまで戻らなければならなくなる。

このように述べると違和感をもつ方がおられよう。とりわけ専業主婦として子育て中心の人生を送ってきた方は、子どもよりも仕事や自分の都合を優先するかに見える最近の若い親と一緒にされては困ると思われるであろう。だが考えてほしい。そのような親を誰が育てたかを。いったい、親になりきるとはどういうことか。全てを子どものために費やすというのであれば、人間の歴史でそのような親は元々多数派ではなかった。少なくとも戦前の日本では、心情的には親であることを自己認定(アイデンティティ)の中核においても、生活の全てを子どもに費やす余裕はなかった。多産多死の社会は生きるための労苦に時間の大半が割かれた。専ら家事育児に従事する女性、すなわち専業主婦が多数派になったのは、1960年を前後して本格化する高度経済成長とともにである。子ども二人を母親が専従で育てる家庭は、戦後復興を終え、豊かさを求めて飛び立とうとする日本経済の担い手を支える場として誕生したのである。

したがって、日本の少子化は最近始まった現象ではない。第二次大戦後のベビーブーマーとして1949年生まれの270万人をピークとする団塊の世代が生まれたあと、わずか10年で子どもの出生総数は160万前後に、一人の女性が産む子どもの平均(合計特殊出生率)は4.3(1949年)から2.1(1960年)へと半減する。敗戦後の日本の復興を果たすために、「貧乏人の子沢山」から「少なく産んでよく育てる社会」への転換を目的に産児制限が推奨された結果である。ただし、この減少が直接現在の少子化



に進むわけではない。団塊の世代の成長とともに親の数が増え、出生数は1973年の209万（団塊ジュニア）に向かって増加するが、合計特殊出生率は人口の再生産に必要な2.08（人口置換値）とほぼ同率で推移する。先に1960年前後を境に、「二人っ子」の時代になったと述べた理由である。通常この時期の子どもの減少は、積極的に減らした意味も含め、少産化という人口学上の概念で位置づけられる。

ところが、1980年代に入るところから再び合計特殊出生率が下がり始め、1989年の「1.57ショック」を経て2001年は1.33。出生数も120万人前後になる。この二回目の合計特殊出生率低下に伴い少子化という言葉が一般化した。その原因は晩婚化もしくは結婚をしない男女の増加にある。日本は結婚しなければ子どもを産まない社会であり、上記の少産化が進行した時期を境に、結婚をすれば子ども二人という社会になった。0または2、これが少子化のラベルとともに知られるようになった近年の出生率低下の実態である。社会全体の子ども数は大きく変容してきたが、家庭のなかの子どもの数と位置づけは、1960年以降、変化は少ない。そして今、少産化の最初の世代（少産世代）が40歳前後になったとすれば、問題の根を少産世代の生育過程、いかえれば現在60歳代にいる方たちの子育て過程に求めざるをえない。専業の母親が少なく産んでよく育てたはずの、その意味で親になりきった人たちの育てた子が自分の子を産む年代になったときに、親になりきれないどころか、親になること自体を避けた結果が、現在の少子化現象の背景にある現実だからである。

父親の場合はどうか。子のために働くという仕事への動機付けとしての父の意識はあっても、子育てのノウハウを伴う父親を人生に体現してきた方がどれほどおられるか。元来、専業主婦の誕生は産業（工業）化の進行に伴う職住分離と性別役割分業による夫の被雇用者（サラリーマン）化とセット。それは働く姿と共にあった父の世界が子どもの前から消えることでもあった。ただし夫婦（父母）の間に、親として子どもを良く育てるための役割分業による予定調和の意識はあったであろう。父母になることと良き親であることを同義とみなすことに疑いをもつ方は少なかったはず。

とすれば、ますます問題の根は深まる。そのような子育て専従の母親と仕事専従の父親のもとで育った人たちが、現在の親になりきれない親の多数派の親とすれば、問うべきは、自己の人生を子どものために費やすかどうかではなく、自分たちの営みによってこの世に生を得た人を、一人の人間として自立させられるかどうかではないか。判断の基準は親の現在ではなく、子どもの未来におくべきである。

ただし、子どもの自立の責任の全てを一組の親のあり方に帰するほど社会は単純ではない。少ない子どもの幸せを願う親の思いは、社会の制度と関わって具体化する。

## 2) 高学歴化と産業化の進行をもたらしたものは

子どもの自立ということであれば、具体的な社会のあり方との関係が重要になる。農業社会なら、農の技能と家の維持と家族の世話がセットになる。多世代と多子が同居する家族のなかで、子に親の生き方を伝え、子はその経験を自分の子に伝える一方で、親の生涯を支えることが課題になる。そこでは親からの自立の価値は低い。

だが、職と住の移動を前提に、自己の意欲と才知で人生を開くことが基本の産業社会ではどうなるか。親と子が異なる人生を歩むことが当然視され、自分たちの世界から出ることを前提に子を育てねばならない。親子の関係は人生の一時期に限定され、親子ともに独自の人生を歩むことが求められる。代々家を受け継ぐことが重視された農業社会とは逆の課題である。だがこれまでの親子の論議のなかで、良き親であることは問われても、親の役割の終え方についてどれほど関心が払われてきたか。その典型を最近の Parasite 家族と揶揄する論調にみることができる。

少子化の原因の晩婚と未婚化の進行と関わって、都市の結婚しない男女、とりわけ親と同居する女性が問題視されるが、その女性たちが社会にでた 1980 年代、親との同居が企業の採用条件であったはず。働く女性の多くは子育てのために自分の母親の力を借りるはず。Parasite（寄生虫）関係は今に始まった現象ではない。親子の同居は農業社会では当然のこと。長男は家を出てはならず、家族の世話で生家に留まる女性も少なくなかった。ただし、子どもを二人にした親が子どもの自立を望まなかったわけではない。産業化は氏素性ではなく能力を重視する。わが子の才知を高める保証を得るため、より高い学校歴を子どもの未来のために準備する、との意味で、日本の親は産業化に対応しようとした。少産化の動機となった「よく育てる」という親の思いは、高学歴化という社会制度として現実化した。その証左が、子ども二人が定着した 1960 年生まれが 15 歳に達したときに高校進学率が 9 割を超え、短大を含む大学への進学率も 4 割、専修・専門学校を入れれば高卒後の進学者が同年代の 7 割近くになったこと。その背後に、義務教育終了者を工場労働者、高校卒業者を中堅技術者、大学卒業者をエリート、という学歴別の人材配分装置の一般化があった。戦後の産業化は、学校での成績（本人の努力）で自己の社会的位置を決定できる仕組みとともに進行したわけである。ただし、高校は全入に近くとも、その上の大学定員が一定なら、親の子どもへの愛の証としての進学への夢は、結果的に進学競争の激化として子どもに迫ることになる。それも男女を問わず。原則として、学校の成績（試験の評価）に性差は考慮されないからである。このことは女性の進学に関してプラスに機能した。

短大というバイパスを經由してではあるが、女性の進学率は1980年代半ばに男子を上回ったからである。このように少産世代から女性の高学歴化が始まるが、それは性差ではなく自分の能力で自己の位置を決定することが自己形成の中核に位置付けられることを意味した。その先には自己実現を最上位とする生き方が待っていると同時に、工業化から情報化の段階に入った1980年代の日本社会が彼女らを迎えた。経済の拡大とサービス化による人手不足と労働集約型から知識集約型への転換に加えて、男女雇用機会均等法の後押しもあって、多くの女性が仕事の面白さと自由な時間と友人と金銭を得る喜びを味わった。だがそれは自分が育つ過程で、母親になるための準備の機会を失うことでもあった。さらに、専業主婦として自分を育てる母への感謝は育まれても、30代後半にはその役割が終わり、新たな人生に戸惑う母の姿をみるのが加わった。二人っ子として学校中心に育つ過程には、自分の親以外に身近に子どもを育てる女性の役割を経験する機会は極めて少ないからである。

観念の世界で理想的な親を描けても、子育ての喜びと理不尽さの感覚の学習はできない。成績を代表に学校が要求する自己実現の価値のヒエラルキー（自分が努力した結果は自分に返ってくる）のなかに、他者（子どもや夫）の成長（昇進）に自己実現の成果を委ねる生きかたは入っていない。すなわち、専業主婦の母のもとで学校中心に二人っ子として育った女性には、自己認定（アイデンティファイ）の対象に母として生きる自己像を定位する機会を得ないまま成人することが碎付けられた。母親像は職業人としての自分と並ぶ選択可能な観念の一つ以上のものではない。おまけに、最も身近なモデルである自分の母親の姿から、母として生きるのみでは自己の人生が終わらない現実をリアルにビルトインせざるをえなかった。専業主婦が理想とされる時代の終焉の鍵は、専業主婦に育てられた娘によって開けられたわけである。

### 3) 落とし穴はどこに

さらに少子化は母親となる女性にもう一つの現実を迫ることになる。子育ての孤立化である。人口1千人のなかでの一年間の出生数を示す普通出生率をみると、団塊の世代が約34人に対して団塊ジュニアは約18人と半減。どこの家にも4人から5人の子どもがいたのが2人になったことを反映する数値である。ところが、そのまた半分の9人台が最近の数値。ただし、結婚した女性の産む子どもの数が2人というのはつい最近まで変化していない。近年の少子化は家族のなかの子どもの数との関係では、子どもがいる家族自体の減少とみなければならぬ。団塊の世代は自分と友達双方の兄弟姉妹との関係を通じて、さまざまな年代と交わることができた。生活の糧のため

に働く両親にかわって、先輩、後輩、仲間が自己形成のエージェントになる。その子どもの世代に重なる団塊ジュニアは兄弟姉妹が二人になり、異年齢と交わる機会は失ったが、同年齢の遊び友達を近所で見つけることはできた。新たな自分に飛翔するためのモデルは得られなくとも、現状を追認してくれる仲間はいたわけである。だが現在の少子世代は自己確認の鏡となる同年齢の仲間をも失いつつある。このような少子化に伴う子どもの世界の変化は、そのまま親、とりわけ専業主婦として子育てに向かう母親の現実と重なる。自分を確認する鏡を見出せないのは、母親の方ではないか。

夫＝父親となる男性の場合はどうか。専業主婦の前提が性別役割分業である以上、もともと親になる準備は予定に入っていなかった。だが、子どもを二人に限定し、男女ともに高学歴に育て、ともに働く社会を準備するなら、子育ての仕組みもまた共同参画型の制度に転換しなければならなかったはず。その改編は少産世代の誕生とともに始めるべき課題であった。ところが実際はどうだったか。後追的であったが、男並みの平等には配慮してきた。だが女性に割り振った家事育児の役割を平等にすることに対して、どれだけ制度的に保障してきたか。結局は女性の労働力を必要とする社会になっているにもかかわらず、子育ての責任は子どもを産んだ母親一人の責任とする意識と制度が変わらないままにきたことが、現在の出生率の低下をもたらした。

その条件のもとで育児に向かう母親は、まさに機能不全になった社会制度と慣習の矛盾を、たった一人で背負わなければならない。その重圧に耐える悲鳴にも似た叫び声が、育児不安となって噴き出していないか。児童虐待もまた同じ文脈から捉え返すべきではないか。そして、この孤立したモデルなき子育ての悲劇を避ける知恵（苦肉の策？）が、親になりきることへのとまどい（拒否？）とみなすことができまいか。

問題は女性にのみ仕事と育児の両立を求める社会システムの方である。もし本当に女性が一齐に育児のために職場を放棄したら、日本の社会は文字通り機能不全に陥る。

このように少産世代の成長過程を位置づけるなら、少子化、高学歴化、産業化の落とし穴とは、子育て期に求められた親と社会制度のありかたと、その子が成長し親になる年代になったときに求められる、親と社会制度のあり方の間にあるズレとしてみなすことができよう。良かれと思ったことが、時と場所を違えば悪くなることは世の常とはいえ、子どものためと信じて自らの人生を創造してきた人たちにとっては、認めがたい評価かもしれない。だが、少子化、高学歴化、産業化の流れを止め得ないとすれば、その穴は、ありもしない過去の母親の美化ではなく、共同参画を阻む制度と意識の改編によってでしか埋め得ない。その鍵は今、親、とりわけ母親であることをためらう人たちに寄り添うことによってしか見出せないと考える。

### 3. 子育てが不安になる時代背景

#### 1) 子どものいる家族が少数派に

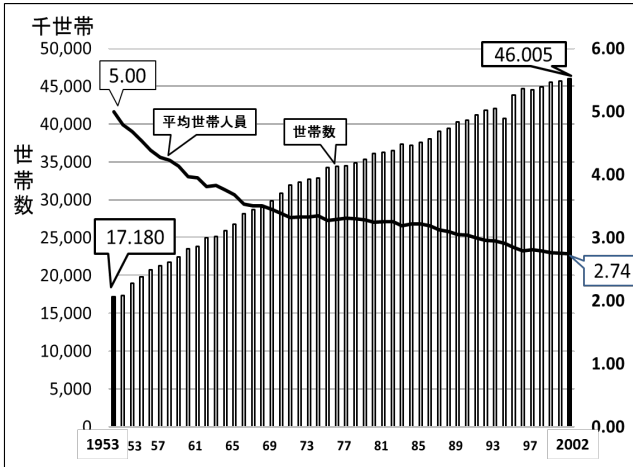


図6-1 世帯数と平均世帯人員の年次推移：厚生労働省「2002年国民生活基礎調査の概況」より

いま、日本の家族は、誰もが経験したことのない条件のもとにある。特に子どもとその親が置かれた状況は特異である。それを象徴するのが図6-1である。世帯数が1953年の1718万世帯から2002年の4600万5千世帯へと増加したのに反し、平均世帯人員は5人から2.74人へと減少。平均世帯人員が3人以下ということは、子どものいる家族が少数派になったことを示唆している。

そこで図6-2を見てほしい。1975年には1人、2人、3人以上合わせて53%、半数以上の世帯に子どもがいた。だが2002年には27.8%とまさに半減。少数派どころか4分の1になった。他方、子ども数も1人が20.0%から11.8%、2人が24.6%から11.9%、3人以上が8.4%から4.1%と同じ割合で減少している。この数値は1989年の1.57ショックから本年(2002)の1.32へと下がり続ける合計特殊出生率(1人の女性が生涯に産む子ども数の平均値)とともに危惧される「少子化」の実態を示している。それは家族の中の子どもではなく、子どものいる家族自体が減少することである。このことは、子どもとその親、とりわけ母親となる女性が孤立する可能性が高まることでもある。そして孤立は不安の条件となる。

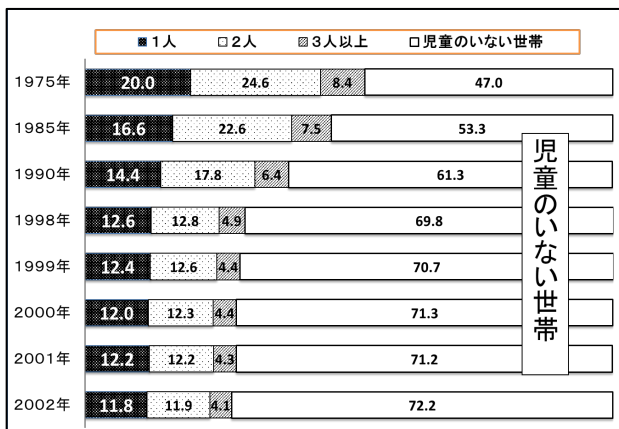
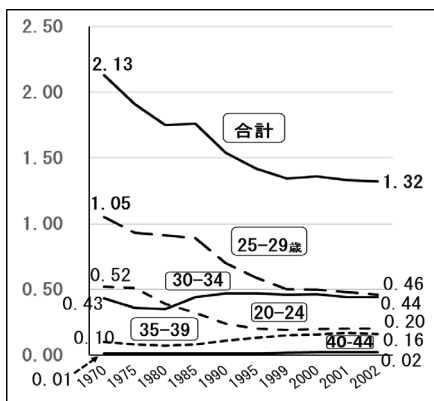


図6-2 児童有（児童数）無別に見た世帯数の構成割合の年次推移：厚生労働省「2002年国民生活基礎調査の概況」より

子どもを持つ家族が多数派なら、子どもは自ずと多様な人間関係のなかで生まれ、母親も育児のモデルを身近に得ることができる。だが少数派になれば、いずれの機会も少なくなる。このような変化を考慮せずに母役割を強調すればどうなるか。母子双方の孤立化を助長し、不安感を高める。どこの家にも子どもがいた時代とそうでない時代では、父親や他の家族との関係（役割）が変化することを忘れてはならない。

## 2) 親専業になる女性が少数派に



さらに厳しい条件が重なる。図6-3を見てほしい。20代の合計特殊出生率は大きく低下するが、30代前半はほぼ平行、30代後半はむしろ上昇している。また図6-4から、20代前半の女性では9割近く、後半でも5割以上が未婚、30代に入っても前半では4人に1人が未婚であることがわかる。これは20代の女性の場合、母親となることは同世代のなかで少数派になることを意味する。当然、不安感は高まるであろう。

図6-3 合計特殊出生率の年次推移（5歳階級別内訳）：厚生労働省「2002年人口動態統計月報年計（概数）の概況」より

30代はどうか。別の問題が出てくる。図6-5から、結婚をして子どもを持つ30代前半の4割近くが仕事をしていることがわかる。また、図6-4は30代前半の3人に1人は未婚で働いていることを示す。あわせれば子どもの有無にかかわらず同世代の多数派は仕事、すなわち子育て以外の世界を持っている。30代後半からは、子どもがい

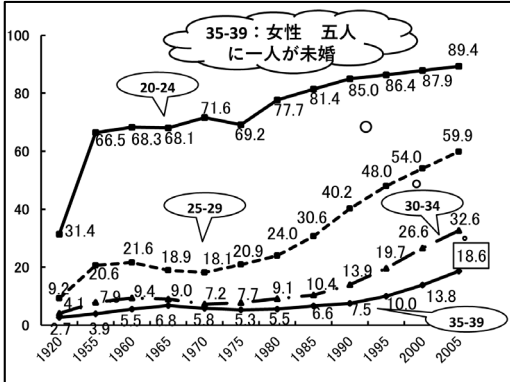


図6-4 年齢(5歳階級)別未婚率の推移(女性): 国勢調査より

ても仕事をしている母親が多数派である。30代の女性にとって親になることは多数派でも、親専業になることは少数派。30代で母親になるストレスは20代よりも高いはず。おまけに、家事育児専業の道を選んだ女性に苦楽を共有できる仲間は少ない。他方、仕事をしながら子育てをする女性は、それ故の問題が重なる。

すなわち、育児のために仕事につかない女性が少数派になる条件のもとでは、育児に専心する母親像を前提にした子育ての強調は、そのこと自体が二重に問題を増幅する。その一つは、両親ともに就労する家族を前提にしない限り、今を生きる親と子ども

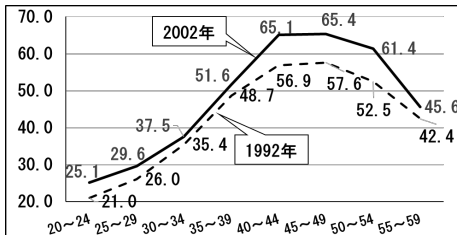


図6-5 20~59歳(5歳階級)女性の「配偶者あり・同居あり・仕事あり」の割合の年次比較: 厚生労働省「2002年国民生活基礎調査の概況」より

もの多数派の実態から離れたものとならざるをえないこと。もう一つは、少数派となった親専業の女性には、それが旧来の常識から判断して正しいものであればあるほど、育児不安に陥る可能性を高めてしまうことである。

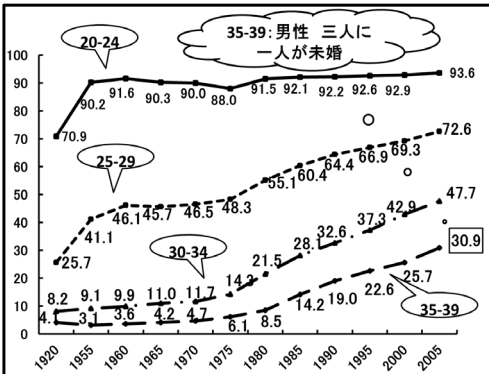
ただし、たとえ少数派でも父親のパートナーシップで問題を解消することは可能である。だが図6-6から、男性は各年代とも女性以上に未婚率が高い。仕事中心から育児への転換はより困難となろう。まして、仕事の癒しを妻に求める夫であれば、虐待への道すら開くことになる。問題の根はより深いといわざるをえない。

### 3) 親になる学習の機会が失われる

改めて図6-4(女性)と図6-6(男性)の年齢別未婚率の変化を追ってほしい。20代

前半では1975年から1980年の間に差があり、それが5年ごとに次の年代に移っていることが確認されよう。1980年の20歳は1960年生まれ。今（本稿執筆時2003年）、40歳代に届こうとする人たちであり、現在子育て期にある男女、すなわち本稿が対象とする親の世代である。実はこの男女から2人の子どもを専業主婦が育てるという家族が日本社会に定着し、20歳を過ぎても学校で自己形成をすることが多数派になる。この人たちを、工業化（労働集約型）から情報化（知識集約型）に移行した1980年代日本社会が受け入れた。経済の拡大とサービス化は、男女雇用機会均等法の後押しもあって、多くの女性に“仕事の面白”さと“自由な時間”と“友人”と“金銭”を得る喜びを味わう職場を用意した。だがそれは、自分が育つ過程で“親となる学習”をする機会を失ったまま成人せざるを得なくなる最初の世代になることを意味する。

まず女性だが、二人っ子として学校中心に育つ過程では、子育ての喜びと理不尽さの感覚を学習できない。成績を典型とする学校が要求する自己実現の価値のヒエラル



キー（自分が努力した結果は自分に返ってくる）のなかに、他者（子どもや夫）の成長（昇進）に自己実現の成果を委ねる生きかたは入ってこない。母親像は職業人としての自分と並ぶ選択肢の一つ以上のものではなく、自分の母や親となった先輩の姿から、母として生きるのみでは自己の人生が終わらない現実を知らされる。

図6-6 年齢(5歳階級)別未婚率の推移(男性) : 国勢調査より

男性はどうか。あえて言及することもないであろう。仕事中心の父親から子育てのノウハウを学ぶことは不可能。息子に向けられる母の愛は、勉強以外の全てを奪う。親になる前に一人の人間として自立する条件から問い直す必要がある。その迂回なき父親業の強調は、かえって問題を拡大する可能性さえ危惧される。

#### 4) 子育ての目的と子どもの位置づけの転換を

したがって、現代の親子が置かれた条件の下では、従来の性別役割分業を前提にする限り、問題の解消どころか、それ自体が不安の原因となる。ではどうすればよいか。男女が共に働き共に育てる社会システムへの改編が根本だが、今を生きる子どもと親



には間に合わない。そこで今すぐ行なえる処方を二点提示したい。

その一つは親の子育ての目的の転換である。キーワードは自立、親の課題は「よく育てる」から「よく離す」ことへの転換。理由は現代社会では親と子が異なる条件のもとで生きることが強制されるからである。重要なのは自立とは孤立ではないこと。他者との関係があって始めて自ら立つ位置を知ることができる。父親の育児参加を説くだけでは、子育ての現状を改善できない。まして3歳児神話では自立を説明できない。子どもの自立の場が家の外にある以上、自立への責任は親のみでは担え切れない。

これが二つ目の処方として、社会全体の子どもの位置づけの転換をあげる理由である。かつて日本社会では子どもは「家の子」であった。それが「国家の子」に拡大され悲劇の淵源となったことを反省し、「私の子」に転換することから戦後の民主化が始まった。それを具体化したのが専業主婦による2人の子育て。だが今その家族が内側から解体されつつある。そこで生まれ育った男女が新たな家族を作ることをためらっているからである。その問題の根が、子どもを産んだ一人の女性に子育ての負担を強いることにあること。さらにそれは、子どもにとって一人の人間として自立するために必要な知識、技能、態度の獲得を困難にする。その意味で、子どもを改めて社会全体の中に位置付け直す必要がある。その方向が「社会の子」である。

その方法は様々である。税（公助）を中心にすべきか。個人負担（自助）の割合をどうすべきか。いたらない部分を互いに支えあう（共助）べきか。今、政府や自治体が推進する保育園の増設は公助の典型だが、そこに子どもを通わせる親の負担は自助となる。他方、共助の典型は各地で展開される子育て支援活動。より専門化されたNPO（非営利組織）も共助の理念の組織化である。

改めて確認しておきたい。今多くの親は経験不足に加えて、人間関係を培う力が弱く、身近に相談相手を見出すことができず、孤立した子育ての状況にある。それらは育児不安どころか児童虐待の条件ともなる。このような現状が求めるのは、親の力不足や責任を問うことではなく、先輩のアドバイスや子育て仲間の人間関係を豊かにし、親として必要な力を育む機会を身近な生活の場に用意することでなければならない。さらに、このような人間関係をより広く地域全体の教育力とするために、地域の人々による積極的な支援の仕組み作りが必要である。生活の場を共有する人たちの交わりを基盤に、子育てを支えるヒト、モノ、情報のネットワークを積極的に広げるための行政施策やボランティア活動の重要性が指摘される理由である。

(馬居政幸)

## Column6-1

### 高校教師から二男二女の母に、そして議員に

「第6章 少子化を求めた家族と女性のリアリティ」に書かれている内容を、私自身の体験と照らし合わせて検証してみようと思う。

日本では1949年生まれの270万人をピークとする団塊の世代の後、出生数はわずか10年で160万人前後まで減少、一人の女性が産む子どもの数(合計特殊出生率)は4.3から2.1へと半減した。しかしこの時の少子化は今の時代と違い、さまざまな施策やキャンペーン等を通じて意図的に子どもの数を減少させたものである。つまり日本においてはあえて二人っ子にしたわけで、これは人口政策の成功例として賞賛された。ところが、1980年代から再び合計特殊出生率が下がり始め、今では少子化が国の存続基盤を揺るがす大問題だと、認識されるようになってきている。この「第6章」では、現在の少子化の原因とその解決策を考察している。

日本は「少なく生んでよく育てる」ことを目的に、高学歴化と少子化をセットにして新しい社会を創造してきた。一見それは成功したかに見えた。ところが、その結果が国を滅ぼしかねない現在の少子化ではないかと言われているのである。私自身は、訳も分からないまま、この時代のど真ん中を生きてきた。

子どもの頃、お父さんは企業戦士としてしっかり働き、お母さんは専業主婦として家庭を守り子どもを育てる、それが理想的な家族。子どもは二人、できれば男の子と女の子一人ずつ、などと意味のわからないモデル世帯を示され、私はそのこと自体に混乱したのを覚えている。なぜなら一方で男女は平等、女の子もしっかり勉強して大学へ行って、自己実現のために仕事を選んでよいのだと、学校では教わっていたからだ。いったいどちらが正しいのだろう。両立はできるのか。しかし、どうせ社会のシステムは女の子が自己実現できるようにはなっていないだろうと本能的に疑いつつ大人になった。そして社会に出てみたらやはりその通りだった

1952年生まれの運動神経抜群だった私は、小さい時から「女のくせに」と言われつづけた。木登りがうまい、男の子よりもボール投げが得意、走るのも早い、泳ぐのもうまい私は、男の子に負ける気はしなかった。中学校の時はテニス部に入り、一年中真っ黒。6人の女子チームで、四国にあるすべての大会のタイトルを総なめにした。あらゆる場面で男子に負けたことはない。ところがなぜか学校では学級委員長は男子、副委員長は女子と決まっていた。ちなみに高校時代も私は生徒会副会長だった。

学校の成績もかなりよかった。地方の進学校に進み、姉が地方の国立大学に進んだ

ので私が東京の国立大学に行くと言った時、両親とも反対はしなかった。大学卒業後、埼玉県の高校教師となり、1年後に結婚した。結婚した相手がこの「第6章」を書いた張本人、わたしが入った大学の3年先輩だった。「男子、厨房に入らず」と言われて育った、勉強だけできるもやしっ子だったらしい。結婚1年後に長男が生まれた。仕事を辞める気などさらさらなく（夫が無収入だったのでやめるわけにいかなかったのだが）2か月後の産休明け、この国にはゼロ歳児保育というものがないことを知り、愕然とした。その時まだ大学院生だった夫は、どうすればよいのかなど考えてもいなかった。その上、夫は1年後には静岡大学に就職が決まり、さっさと単身赴任してしまった。

この時もひと悶着あった。子どもは私の扶養家族だったのだが、夫の仕事が決まったなら夫の扶養家族に変えるべきだと言われたのだ。「でもこれからも育てるのは私であって、夫ではない」という主張を貫くのは大変だった。前例がないというそれだけの理由で。しかしその時私が頑張ったおかげで、今では当たり前、どちらの扶養家族でもよいことになっている。

というわけで、私のシングルマザー生活が始まったのだが、それよりも保育園をどうするか。幸い教員仲間から、近くに住む、保育園を退職して自宅で子どもを預かっていた保育士さんを紹介していただき、結局静岡に転居するまでの2年あまり、その方に長男をみていただいた。これは、近くに親戚や知人のいない私にとっては大変ありがたいことで、実の親以上に親身に子育てしていただいたと思っている。というより、その方がいなければ私は一人では絶対に子どもを育てられなかったと、今でも確信をもって言うことができる。

全く無謀な子育てではあったが、私にとって、仕事をしていても結婚して子育てするのはごく当たり前のことで、そのことに疑念はなかった。そういう時代だったのだと思う。しかし、近くに子育てを助けてくれる親や親せきなどがいれば何とかなったと思うが、私のように東京の大学に進学し、実家から遠く離れたところで出産した場合、子育てを助けてくれる人もシステムも皆無だった。それもそのはず、そのころまだ日本という国は、相変わらず男が外で働き女は専業主婦として子育てに専念するものと言う性別役割分業を推進していたのだから。女性が働くことを実際には想定していなかったのだと思う。それなら男女平等なんて言わないでほしいと、内心腹を立てながらも、私自身は周りの方々に助けをいただき、結構楽しいシングルマザー生活ではあった。教員として修学旅行に付き添う時など、二泊三日で子どもを預かってもらい、普通の人より自由だったかもしれない。

静岡に転居したのは長男が2歳4ヶ月の時、思えば一番大変な年齢だった。物心ついたちょうどそのころ、毎日母親と一緒にいるという生活を知ってしまった長男は、私から一瞬も離れなくなってしまう。私は一人ではトイレにも行けない、ごみ出しにも行けない、働くなんてとんでもない、という何とも不自由な生活を強いられるようになったのだ。自由なシングルマザー生活のツケが回ってきたというわけである。

静岡に来てから、特別支援学校の校長先生などから「非常勤講師として来てほしい」という連絡が何度もあった。ところがそういう時に限って必ず私は妊娠していて、次々3人の子どもが生まれ、とうとう4人の子持ちになった。そして結局末の子どもが中学3年になるまで、計らずも専業主婦を続けることになってしまったのだ。

専業主婦と言えば聞こえは良いが、覚悟してなったわけではない私は、ほとんど一人で4人の子どもたちと格闘し、ある時はヒステリックに怒鳴り散らしたり、泣き止まない赤ん坊を投げつけそうになって、すんでのところで思いとどまったり。ひどい母親だったとも思うが、後で聞けばこれは私だけの経験ではなく、私の友人たちは異口同音にそうだったと言っている。大学の講義や、講演会などで「二人でしっかり家事を分担して、力を合わせて子どもは育てるべきなのです」と、調子よくのたまわっていた夫も、家では時々お風呂に入れるくらいの手伝いしかしなかった。残念ながら我が家にイクメンのお父さんはいなかったのだ。

夫が「第6章」で何度も述べているように、意図して専業主婦になったわけではない私には「子育てを失敗するわけにはいかない」という気負いは皆無だった。そんな高尚な思いがあるわけがない。それどころか次々生まれた4人の小さな子どもを育てるだけで、いつ寝ていつ起きたかわからないくらい全く余裕がなかったのも事実だ。働いている方がずっと楽だ！4人を預けて働きたいと、何度思ったことか。夫が何回も何回も書いている『子育ての喜びと理不尽さの感覚の学習』という言葉。学者が言うとうそいう表現になるのかもしれないが、そんな生易しいシロモノではなかった！！「理不尽さの感覚の学習」とは、私にとっては単なる感情の爆発でしかなかった。いわゆるヒステリーだ。

しかしそうは言っても、子どもは想像以上にかわいくて、面白くて、子育てに飽きることはなかった。今振り返っても、あんな楽しい時間はなかったと、心から思う。苦労も多いけれど確かに子育ては楽しい。

というわけで、私は女性が仕事と子育ての両立に悩み始めたまさにその時代を生きてきた。自分の手で子育てすべきか、子どもを預けて働いた方がよいのか、誰もが悩み苦しんでいた。

日本という国はあえて少子化をめざし、少なく生んでよく育てることを目標にした。そのうち「男女雇用機会均等法」などの後押しもあって、女性が働くことが珍しくない社会になってきた。そしてとうとう、女性が働かなければ社会が回っていかない時代になって初めて、後追いで子育て支援に力を入れ、女性に働きながら子どもを育てることを推奨するようになった。しかしこれはどう考えても順番が逆なのだ。子育て環境を整えることこそ最優先されるべきであった。男性も女性も同じように働いてもらいたいというのなら、社会全体で子育てする環境を、まず整えるべきではなかったのか。

しかし残念ながら、子育てと仕事を両立できる社会はなかなか用意されなかったし、今も完璧ではない。いまだ保育所には待機児童がいて、働きたくても働けない母親がいるのだ。

私はそういう社会の根底には「子どもは女性にしか産めないから、子どもを育てるのはやはり女性の仕事なのだ」という、一見正しいと思えてしまいそうな古い考えがあり、日本の国はいまだそこから抜け出せていないのだと思う。だから、保育士の待遇が一向に良くならない。私には、子育ては母親にでも(女にでも)できる仕事だから、大した仕事ではないと社会全体が保育や子育てを嘗めているようにしか見えない。

私は、子育てが一段落したときに、少しでも子育てしやすい環境を作りたいと思って議員になった。後輩たちのために子育てしやすい世の中を用意したいと考えたのである。そして議員になって初めて、この国が子育て支援の面で、恐ろしく立ち遅れていることを知ることになったのだ。その根本は「第6章」に述べられている通り、女性にのみ子育てと仕事の両立を求め続けてきた(押し付けてきた)社会システムだったと思う。男女平等と言いながら、全く男女平等にはなっていない社会のシステムを、子育てについても男女平等、男女共同参画型に抜本的に見直していかなければ本当の解決にはならないし、少子化はこれからもつづくに違いない。

子どものころから「男女平等」と言われるたびに腹を立てていた私だが、「男女平等? そんなの当たり前じゃないですか」と言える日が一日も早く来ることを願わずにはいられない。

(馬居喜代子)

